

化学・繊維

1. 評価対象企業（21 社）

帝人、東レ、クラレ、旭化成、昭和電工、住友化学、日産化学、東ソー、デンカ、信越化学工業、エア・ウォーター、日本酸素ホールディングス、カネカ、三菱瓦斯化学、三井化学、JSR、三菱ケミカルグループ（注 1）、ダイセル、積水化学工業、UBE（注 2）、日本ペイントホールディングス

（証券コード協議会銘柄コード順）

（注 1）三菱ケミカルホールディングスが商号を変更した（2022 年 7 月）。

（注 2）宇部興産が商号を変更した（2022 年 4 月）。

2. 評価方法

（1）評価基準の構成および配点

評価分野	下記本文中の略称	評価 項目（注）数	配点
①経営陣の IR 姿勢、IR 部門の機能、IR の基本スタンス	経営陣の IR 姿勢等	4	29
②説明会、インタビュー、説明資料等における開示	説明会等	5	25
③フェア・ディスクロージャー	フェア・ディスクロージャー	2	7
④ESG に関連する情報の開示	ESG 関連	3	26
⑤各業種の状況に即した自主的な情報開示	自主的情報開示	3	13
計		17	100

（注）具体的な評価項目の内容および配点は 30 頁参照。なお、評価分野④は「コーポレート・ガバナンスに関連する情報の開示」から名称を変更した。

（2）評価実施アナリストは 28 名（所属先 22 社）である。（氏名等は 31 頁参照）

3. 評価結果

（1）総括（「ディスクロージャー評価比較総括表」は 29 頁参照）

- ① 本年度は、評価項目分野のうちコーポレート・ガバナンス関連を ESG 関連に名称変更したことに伴い、同分野を中心に項目内容・配点を大幅に見直した。このため、昨年度と同列には比較できないが、本年度の総合評価平均点は 70.7 点（昨年度 68.6 点）、総合評価点の標準偏差は 6.6 点（昨年度 7.6 点）となった。
- ② 評価分野毎に平均得点率（評価対象企業の平均点／配点〈以下省略〉）を見ると、経営陣の IR 姿勢等が 73%（昨年度 70%）、説明会等が 72%（昨年度 70%）、フェア・ディスクロージャーが 76%（昨年度 71%）、ESG 関連が 67%（昨年度 66%）、自主的情報開示が 68%（昨年度 62%）となった。
- ③ 評価項目について見ると、最も高い平均得点率となったのは、次の項目（自主的情報開示の中の 1 項目）であった。

- ・ 「開示された公表情報について、E-mail 等を利用して能動的かつ適切に周知していますか」（平均得点率 87%〔昨年度 75%〕）（得点率（評価点／配点〈以下省略〉）：50%1 社・70%1 社・80%3 社・90%14 社・

100%2社)

④ 一方、次の項目（自主的情報開示の中の1項目）が、最も低い水準となった。

- ・「工場見学、ESG説明会、事業部説明会、技術説明会等（アナリスト主催を含む）を実施し、かつその内容は充実していますか」（平均得点率 63%〔昨年度 54%〕）（得点率：30%台 1社・40%台 2社・50%台 6社・60%台 6社・70%台 4社・80%2社）

⑤ ESG関連の3項目（本年度の新設項目）は、次のとおりとなった。

- (a) 「環境（E）関連のマテリアリティを策定・開示し、中長期の取組みを適切に開示していますか」（平均得点率 70%）（得点率：50%台 2社・60%台 10社・70%台 6社・80%台 3社）
- (b) 「社会（S）に関連する情報を積極的に開示し、投資家の理解が深まるように努力していますか」（平均得点率 65%）（得点率：50%台 3社・60%台 13社・70%台 4社・80%台 1社）
- (c) 「資本政策、株主還元策等が十分に説明されていますか。また、社外取締役を含め、ガバナンス（G）の有効性が示されていますか。（平均得点率 64%）（得点率：50%台 7社・60%台 10社・70%台 3社・80%台 1社）

(2) 上位3企業の評価概要

第1位 三井化学（ディスクロージャー優良企業〔2回連続6回目〕、総合評価点 83.3点〔昨年度比+0.9点〕）

- ① 同社は、経営陣のIR姿勢等（得点率〈以下省略〉87%）、ESG関連（78%）が第1位、フェア・ディスクロージャー（83%）、自主的情報開示（85%）が同得点第1位、説明会が第2位（83%）となった。
- ② 経営陣のIR姿勢等においては、「経営陣のIR姿勢」の2項目が共に最も高い評価となった。これらに関連して、経営陣が経営方針および目標を定量的・定性的に十分説明していること、事業説明会やスモールミーティング等を積極的に開催し、投資家との対話機会が豊富であることを評価する声が寄せられた。また、中期経営計画とESGが一貫した文脈で述べられており、整合性が高く、説得力があるとの声もあった。「IR部門に十分な情報が集積され、アナリストが要望する情報を提供し、担当者と有益なディスカッションができること。経営分析に必要かつ重要な情報開示の継続性に配慮されていること」も高い評価となった。「会社にとって都合の悪い情報、自社の弱点、低収益あるいは赤字の事業についても積極的な開示を行い、今後の改善の展望を示していること」は、同得点第3位となった。これらに関連して、定量情報の開示が充実しており、短中期の業績変動要因、会社の方向性、長期戦略等に関する質の高い議論ができることを評価する声が寄せられた。
- ③ 説明会等においては、「インタビューにおける補足説明が十分であること」が同得点第1位となった。また、「決算説明会における会社側の説明は十分であること」（第2位）も評価された。これらに関連して、四半期業績の説明力が高い、インタビューでの説明が充実しているとの声があり、また、決算説明会に加え経営概況説明会を開催し、短中期の業績動向と中長期の方向性を丁寧に伝える姿勢を評価する声も寄せられた。
- ④ フェア・ディスクロージャーにおいては、「経営陣およびIR部門が、投資家にとって重要と判断される事項についての開示（メディア対応を含む）に際し、遅滞なく十分に、かつ公平に行っていること」が第2位となった。また、「状況変化に応じて、リモートツール等を活用した有用かつ、速やかな情報提供（説明会、決算説明会の資料・質疑応答、リプレイ、英語対応）を行っていること」も、同得点第2位となった。これらの結果、この分野において同得点第1位となった。これらに関連して、決算説明会の音声再生や要旨を日英両言語で遅滞なく公表し、質疑応答にも対応していることを評価する声が寄せられたほか、資料が見やすく、質疑応答の要旨集もわかりやすいとの声もあった。
- ⑤ ESG関連においては、「環境（E）関連のマテリアリティを策定・開示し、中長期の取組みを適切に開示していること」および「社会（S）に関連する情報を積極的に開示し、投資家の理解が深まるように努力していること」が、共に最も高い評価となった。また、「資本政策、株主還元策等が十分に説明されていること。また、社外取締役を含め、ガバナンス（G）の有効性が示されていること」も同得点第2位となった。これらの結果、この分野において第1位となった。これらに関連して、長期経営計画「VISION2030」策定の過程でマテリアリティを見直し、事業活動とサステナビリティへの取組みが不可分であることを明確に示していること、財務

目標と同様に非財務目標も定量化し KPI を設定し、進捗実績や実績を統合報告書および HP 等で公表していること、また資本政策や財務戦略を明確に示していることを評価する声があった。

- ⑥ **自主的情報開示**においては、「工場見学、ESG 説明会、事業部説明会、技術説明会等（アナリスト主催を含む）を実施し、かつその内容は充実していること」が最も高い評価となり、昨年度に比べ得点率を上げた。「統合報告書、ファクトブック等の内容が充実していること。また、統合報告書において非財務情報（ESG 情報等）を開示し、経営の長期的課題に対する取組みと成果を投資家にわかりやすく伝えていること」も高く評価された。これらの結果、この分野において同得点第 1 位となった。これらに関連して、事業戦略説明会、ESG 説明会、およびおおよびスモールミーティングなどの開催を評価する声があった。また、過去、現在および未来の変化、立ち位置が明確に説明されていることを評価する声も寄せられた。

これら同社の努力と姿勢は、ディスクロージャーのさらなる進展のために他の企業の模範となると認められるので、同社を本年度の当業種における優良企業として選定した。

第 2 位 日産化学（総合評価点 80.8 点〔昨年度比+2.9 点〕、昨年度第 3 位）

- ① 同社は、説明会等が第 1 位（88%）、経営陣の IR 姿勢等が第 2 位（85%）、ESG 関連が第 3 位（75%）、フェア・ディスクロージャーが同得点第 4 位（80%）、自主的情報開示が同得点第 7 位（71%）となった。昨年度に比べ、自主的情報開示の得点率が大幅に改善し、順位が大きく上昇した。
- ② **経営陣の IR 姿勢等**においては、「IR 部門の機能、基本スタンス」の 2 項目が共に最も高い評価となった。これらに関連して、IR 部門が定性面、定量面ともに各種情報をよく把握しており、質の高い議論ができること、増減益分析や製品別売上等の詳細なデータが開示されていることを評価する声が寄せられた。「経営陣が企業価値への意識を高め、決算説明会やミーティング等において経営方針・中期計画などを十分に説明し、IR に積極的に関与していること」も高く評価された。また、「経営陣が企業価値向上の手段としての ESG の重要性を認識し、その取組内容を投資家に的確に伝えていること」（第 6 位）も昨年度に比べ得点率を上げた。これらに関連して、副社長が個別取材対応の中で企業価値向上策や経営方針を明確に説明していること、事業部責任者による IR の機会が増加していることを評価する声が寄せられた。なお、財務関連の説明は素晴らしいが、トップの登壇を一層望む声があった。
- ③ **説明会等**においては、5 項目全てが最も高い評価（同得点第 1 位を含む）となった。これらの結果、この分野において第 1 位となった。これらに関連して、質、量ともに開示内容が充実している、取材時の補足資料に詳細なデータが記載されているとの声が寄せられた。
- ④ **フェア・ディスクロージャー**においては、「状況変化に応じて、リモートツール等を活用した有用かつ、速やかな情報提供（説明会、決算説明会の資料・質疑応答、リプレイ、英語対応）を行っていること」（同得点第 5 位）は、評価された。また、「経営陣および IR 部門が、投資家にとって重要と判断される事項についての開示（メディア対応を含む）に際し、遅滞なく十分に、かつ公平に行っていること」は、同得点第 3 位となった。これらに関連して、IR 資料の完全日英対応を評価する声があった。なお、説明会のリプレイを求める声もあった。
- ⑤ **ESG 関連**においては、「資本政策、株主還元策等が十分に説明されていること。また、社外取締役を含め、ガバナンス（G）の有効性が示されていること」が最も高い評価となった。「環境（E）関連のマテリアリティを策定・開示し、中長期の取組みを適切に開示していること」は、第 7 位となった。これらに関連して、排出量削減目標前倒し、および配当性向維持の開示を評価する声が寄せられた。一方、「社会（S）に関連する情報を積極的に開示し、投資家の理解が深まるように努力していること」（同得点第 11 位）は、平均得点率と同程度にとどまったが、S に関する取組みや開示の改善が著しいとの声があった。
- ⑥ **自主的情報開示**においては、「工場見学、ESG 説明会、事業部説明会、技術説明会等（アナリスト主催を含む）を実施し、かつその内容は充実していること」は第 6 位となり、昨年度と比べ得点率が改善した。これに関連して、機能性材料 R&D 説明の開催を評価する声があった。なお、「開示された公表情報について、E-mail 等を利用して能動的かつ適切に周知していること」は、平均得点率に達しなかった。これに関連して、メール配信を求める声があった。

第3位 住友化学（総合評価点 78.9 点〔昨年度比－0.1 点〕、昨年度第2位）

- ① 同社は、自主的情報開示が同得点第1位（85%）、経営陣の IR 姿勢等が同得点第3位（82%）、フェア・ディスクロージャーが同得点第4位（80%）、ESG 関連が第5位（73%）、説明会等が第6位（78%）となった。
- ② 経営陣の IR 姿勢等においては、「経営陣の IR 姿勢」は第2位となった。また、「IR 部門に十分な情報が集積され、アナリストが要望する情報を提供し、担当者と有益なディスカッションができること。経営分析に必要かつ重要な情報開示の継続性に配慮されていること」も高く評価された。これらに関連して、マネジメントが IR に積極的に関与していること、スモールミーティングなどを通じて投資家との対話機会が豊富であることを評価する声が寄せられた。また、ESG 説明会の継続的な開催を評価する声もあった。なお、「会社にとって都合の悪い情報、自社の弱点、低収益あるいは赤字の事業についても積極的な開示を行い、今後の改善の展望を示していること」は、平均得点率に達しなかった。これに関連して、有益なディスカッションはできるが、開示する情報に一部制限があるとの声もあった。
- ③ 説明会等においては、「インタビューにおける補足説明が十分であること」（第3位）および「決算短信・添付資料と同時に、企業分析に必要かつ十分な補足資料が、T Dnet 経由またはウェブサイトで入手できること」（同得点第3位）が評価された。また、そのほかの3項目も平均得点率を上回った。これに関連して、インタビューでの説明が充実しているとの声があるとともに、一部の事業で定性的にとどまらず定量的情報の開示を望む声もあった。
- ④ フェア・ディスクロージャーにおいては、「状況変化に応じて、リモートツール等を活用した有用かつ、速やかな情報提供（説明会、決算説明会の資料・質疑応答、リプレイ、英語対応）を行っていること」が、高く評価された。これに関連して、決算説明会の要旨が、質疑応答も含め日英両言語で遅滞なく提供され、音声再生の期間も長いこと、また、説明会もハイブリッドで対応するなど先進的であることを評価する声があった。
- ⑤ ESG 関連においては、「環境（E）関連のマテリアリティを策定・開示し、中長期の取組みを適切に開示していること」（同得点第2位）が評価された。また、「社会（S）に関連する情報を積極的に開示し、投資家の理解が深まるように努力していること」は同得点第3位となった。「資本政策、株主還元策等が十分に説明されていること。また、社外取締役を含め、ガバナンス（G）の有効性が示されていること」（同得点第9位）は、平均得点率と同程度となった。これらに関連して、住友の事業精神、経営理念からサステナビリティ推進基本原則、企業行動憲章、コーポレートステートメントまで一貫した ESG への取組みの説明を評価する声が寄せられたほか、マテリアリティや具体的かつ定量的な KPI も設定され、実効性の高い ESG の推進状況の開示を評価する声もあった。
- ⑥ 自主的情報開示においては、「統合報告書、ファクトブック等の内容は充実していること。また、統合報告書において非財務情報（ESG 情報等）を開示し、経営の長期的課題に対する取組みと成果を投資家にわかりやすく伝えていること」が最も高い評価となり、90%以上の得点率となった。また、「工場見学、ESG 説明会、事業部説明会、技術説明会等（アナリスト主催を含む）を実施し、かつその内容は充実していること」は第2位となった。これらの結果、この分野において同得点第1位となった。これらに関連して、インベスターズハンドブック、統合報告書およびサステナビリティデータブックの充実を評価する声が寄せられた。また、ESG 説明会や IR Day 等の開催を評価する声があった。

以上

2022年度 ディスクロージャー評価比較総括表（化学・繊維）

（単位：点）

順位	評価項目 評価対象企業	総合評価 (100点)	1. 経営陣のIR姿勢、IR部門の機能、IRの基本スタンス 評価項目4 (配点29点)		2. 説明会、インタビュー、説明資料等における開示 評価項目5 (配点25点)		3. フェア・ディスクロージャー 評価項目2 (配点7点)		4. ESGに関連する情報の開示 評価項目3 (配点26点)		5. 各業種の状況に即した自主的な情報開示 評価項目3 (配点13点)		前回順位
			評価点	順位	評価点	順位	評価点	順位	評価点	順位	評価点	順位	
1	4183 三井化学	83.3	25.3	1	20.8	2	5.8	1	20.3	1	11.1	1	1
2	4021 日産化学	80.8	24.6	2	22.0	1	5.6	4	19.4	3	9.2	7	3
3	4005 住友化学	78.9	23.8	3	19.5	6	5.6	4	18.9	5	11.1	1	2
4	3407 旭化成	77.7	23.2	6	19.0	7	5.8	1	19.5	2	10.2	3	4
4	4204 積水化学工業	77.7	23.5	5	20.2	3	5.5	7	19.0	4	9.5	5	5
6	4208 UBE	76.0	23.8	3	19.6	5	5.8	1	18.1	8	8.7	13	6
7	4185 JSR	73.8	21.7	7	18.6	8	5.4	10	18.5	6	9.6	4	7
8	4061 デンカ	72.6	21.5	8	20.1	4	5.3	12	17.3	11	8.4	14	9
9	4612 日本ペイントホールディングス	70.5	21.0	11	17.3	12	5.5	7	17.6	10	9.1	9	12
10	4188 三菱ケミカルグループ	70.3	20.6	13	16.5	17	5.6	4	18.3	7	9.3	6	10
11	4182 三菱瓦斯化学	69.6	21.3	9	17.9	10	5.2	14	16.3	14	8.9	11	14
12	4004 昭和電工	69.4	20.2	14	18.2	9	5.5	7	16.7	13	8.8	12	8
12	4202 ダイセル	69.4	21.1	10	17.1	14	5.1	15	16.9	12	9.2	7	17
14	3401 帝人	69.1	20.1	15	16.8	16	5.4	10	17.8	9	9.0	10	11
15	4091 日本酸素ホールディングス	66.9	20.8	12	17.3	12	5.3	12	16.1	17	7.4	18	16
16	4042 東ソー	66.0	19.9	16	17.6	11	5.0	16	15.4	19	8.1	15	15
17	3402 東レ	63.9	18.4	19	16.2	18	5.0	16	16.2	15	8.1	15	13
18	4088 エア・ウォーター	63.8	19.3	18	17.0	15	5.0	16	15.1	20	7.4	18	18
19	4063 信越化学工業	63.1	19.7	17	15.2	20	5.0	16	16.2	15	7.0	21	19
20	3405 クレレ	61.8	18.1	21	15.4	19	5.0	16	16.1	17	7.2	20	21
21	4118 カネカ	59.6	18.3	20	14.7	21	4.7	21	14.4	21	7.5	17	20
	評価対象企業評価平均点	70.69	21.25		17.95		5.34		17.34		8.81		

2022年度評価項目および配点（化学・繊維）

【評価期間：2021年7月～2022年6月】

1. 経営陣のIR姿勢、IR部門の機能、IRの基本スタンス（29点）	配点
(1)経営陣のIR姿勢	
①経営陣が企業価値への意識を高め、決算説明会やミーティング等において経営方針・中期計画などを十分に説明し、IRに積極的に関与していますか。【優れている点あるいは改善が望まれる点についてコメント欄に記入して下さい】	10
②経営陣が企業価値向上の手段としてのESGの重要性を認識し、その取組内容を投資家に的確に伝えていますか。【優れている点あるいは改善が望まれる点についてコメント欄に記入して下さい】	8
(2)IR部門の機能、基本スタンス	
①IR部門に十分な情報が集積され、アナリストが要望する情報を提供し、担当者と有益なディスカッションができますか。また、経営分析に必要かつ重要な情報開示の継続性に配慮がなされていますか。【優れている点あるいは改善が望まれる点についてコメント欄に記入して下さい】	8
②会社にとって都合の悪い情報、自社の弱点、低収益あるいは赤字の事業についても積極的な開示を行い、今後の改善の展望を示していますか。	3
2. 説明会、インタビュー、説明資料等における開示（25点）	配点
(1)説明会、インタビューにおける開示	
①決算説明会における会社側の説明は十分ですか。	7
②インタビューにおける補足説明は十分ですか。	7
(2)説明資料等（短信・添付資料および補足資料を含む）における開示	
①決算短信・添付資料と同時に、企業分析に必要かつ十分な補足資料が、T Dnet経由またはウェブサイト入手できますか。	3
②説明会資料等において投資家が求める情報が継続性やセグメント別情報も含め十分に開示されていますか。	5
(3)四半期情報開示	
・四半期決算の内容の理解に必要な補足情報が十分に開示されていますか。	3
3. フェア・ディスクロージャー（7点）	配点
(1)フェア・ディスクロージャーへの取組姿勢	
・経営陣およびIR部門が、投資家にとって重要と判断される事項についての開示（メディア対応も含む）に際し、遅滞なく十分に、かつ公平に行っていますか。	5
(2)速やかな情報提供	
・状況変化に応じて、リモートツール等を活用した有用かつ、速やかな情報提供（説明会、決算説明会の資料・質疑応答、リプレイ、英語対応）を行っていますか。【優れている点あるいは改善が望まれる点についてコメント欄に記入して下さい】	2
4. ESGに関連する情報の開示（26点）	配点
①環境（E）関連のマテリアリティを策定・開示し、中長期の取組みを適切に開示していますか。	10
②社会（S）に関連する情報を積極的に開示し、投資家の理解が深まるように努力していますか。	6
③資本政策、株主還元策等が十分に説明されていますか。また、社外取締役を含め、ガバナンス（G）の有効性が示されていますか。	10
5. 各業種の状況に即した自主的な情報開示（13点）	配点
①工場見学、ESG説明会、事業部説明会、技術説明会等（アナリスト主催を含む）を実施し、かつその内容は充実していますか。【過去1年間を目安に評価】【充実していた見学会等名をコメント欄に記入して下さい】	7
②統合報告書、ファクトブック等の内容は充実していますか。また、統合報告書において非財務情報（ESG情報等）を開示し、経営の長期的課題に対する取組みと成果を投資家にわかりやすく伝えていますか。【充実していた資料名・取組事例等をコメント欄に記入して下さい】	5
③開示された公開情報について、E-mail等を利用して能動的かつ適切に周知していますか。	1

化学・繊維専門部会委員

部 会 長	渡部 貴人	モルガン・スタンレー MUFG 証券
部会長代理	山田 幹也	みずほ証券
	岡寄 茂樹	野村証券
	木村 光宏	野村アセットマネジメント
	澤砥 正美	SBI 証券
	野口 英彦	アセットマネジメント One
	渡辺 勇仁	大和アセットマネジメント

評価実施アナリスト（28名）

石井 宏	朝日ライフ アセットマネジメント	中原 周一	東海東京調査センター
伊藤 健悟	QUICK	西平 孝	岡三証券
今津 拓洋	アセットマネジメント One	西脇 秀敏	三菱 UFJ 信託銀行
上迫 和也	三井住友トラスト・アセットマネジメント	野口 英彦	アセットマネジメント One
岡寄 茂樹	野村証券	福島 大輔	野村証券
岡田 真一	三菱 UFJ 信託銀行	松川 正子	農林中金全共連アセットマネジメント
河井 啓朗	明治安田アセットマネジメント	南 純一	りそなアセットマネジメント
木村 光宏	野村アセットマネジメント	宮本 剛	SMBC 日興証券
河野 孝臣	野村証券	百田 史哉	三井住友トラスト・アセットマネジメント
阪口 和輝	大和証券	山田 幹也	みずほ証券
佐野 智太郎	JP モルガン証券	吉田 篤	みずほ証券
澤砥 正美	SBI 証券	渡辺 勇仁	大和アセットマネジメント
高橋 豊	極東証券経済研究所	渡邊 亮一	三菱 UFJ モルガン・スタンレー証券
坪井 暁	ニッセイ アセット マネジメント	渡部 貴人	モルガン・スタンレー MUFG 証券

（注） 上記各アナリストの評価実施企業は、各人それぞれ異なることに留意。